北京日本学研究中心

通　　讯

《第34号》

责任编辑：铃木义昭　张龙妹　邮政编码：100081　Tel：8424893　1993.12.30

简　　讯

◇公开讲座：第10、12、13次公开讲座分别于11月8日、12月2日、12月9日（各周四）举行。讲演者及讲演题目如下：李书成　日本人的忧患意识；周维宏　中日农村工业化现象比较；铃木义昭　日中对比研究与日本语教育。第11次公开讲座改为由传马义澄主持的专题研究会（详见下页）。

◇11月27日（周六）"中心"客座研究员李均洋与中国大百科全书出版社主办了「日本经济小说研讨会」。本次研讨会引起了学术界的关注。国内有关报纸及日本「读买新闻」都进行了报道。

◇论文答辩："中心"与12月16日（周四）至18日（周六）举行了第七期研究生的论文答辩。七期生全体（20人）通过了论文答辩。个别学生的论文得到了中日双方答辩委员的好评，认为一点也不比日本同年龄人的论文逊色。

◇12月24日（周五）、29日（周三）下午2:00在"中心"师生活动室举行了第8期客座研究员研究成果发表会。发表者与发表题目如下：李均洋　《解雇》－法人资本主义的经济小说阐释；斐桂芬　日本企业的国际避税和政府的反避税措施；王中田　和辻哲郎在日本思想文化史上的地位及影响。94年1月6日下午2:00还将有朱京伟的「日语借词进入汉语的时间问题」和王克非的「明治时代与晚清文学翻译史比较」的发表。欢迎感兴起的师生参加。

◇12月27日（周一）北京外国语学院在「天桥乐茶园」举行了外国专家迎新年晚会。晚会上专家们不仅看到了丰富多彩的民间艺术表演，还品尝了北京的传统小吃。

◇12月29日，外国专家局在友谊宾馆友谊宫举办了外国在京专家新年联欢晚会。除了专业人员的歌舞、杂技等节目外，还有外国专家的演出。"中心"部分专家参加了这次活动。

□新任专家　自我介绍（其三）□

☆木部　畅子老师：专业是语音学、声调学。现在对方言的语音很感兴趣。平常总是提着录音机去和在田间干活的老大爷、老大娘谈天。放假时则带上水壶和盒饭去近处爬山。

☆柄泽　行雄老师：今年的7月份，结束了在"中心"1年的工作回到了日本。12月我又来了（回来了？）。这样一来，我已是第3次来"中心"服务了。7月到12月的大约5个月的时间里，北京机场、友谊宾馆以及"中心"都发生了变化。正如季节从夏季变成了冬季一样，今年夏天、或今年春天一起学习的学生们也有了或多或少的变化，我为他们的成长而感到高兴。

这次我在"中心"只停留20来天，在这短短的时间里，我期待着我本人、学生们还有"中心"会有新的变化。

公开讲座特集　昭和文学研讨会

第11次公开讲座改变了原来的计划，组织了题为「昭和文学的各个侧面－转换期的精神－」的研讨会。这完全是因为得到了作为报告者从日本赶来参加的锐意进取的研究者们的通力协作的结果。

首先，柳泽孝子女士（日本桥女学馆短期大学副教授）的「家的崩溃」，以小岛信夫的『拥抱家属』为中心，就战后文学主题之一的＜家＞的变化、解体作了详尽的报告。接着是山本康治先生（嘉悦女子短期大学副教授）的「"个"的变化－以村上春树为中心－」的报告，通过对村上的最新作品『国境以南、太阳以西』的分析，指出了作品反映出来的现代社会中个人的现实感的丧失现象。古俣裕介先生（东京经营短期大学教授）的「都市小说的变迁」，在都市小说范围内，对从横光利一到村上春树，也就是对在19世纪20年代至80年代期间出现的现代主义的源流作了概述。佐藤健一先生（日本大学副教授）的「转向论的问题」，就昭和文学中出现的「文学与政治」问题，从日本国家权力和社会构成方面着手，试图在差别论和转向论之间筑起一条通道。

听众大约有120 名。报告人发言结束后，听众踊跃提问，超过了预定的讲演时间。这无疑是听众、尤其是学生们对日本现代文学的强烈兴趣的体现。每个报告的时间尽管很短，但所准备的大量资料将对今后的研究有很大的帮助。

主持人及撰文　传马义澄国学院大学副教授

☆　日中学生交流会　☆

山本武利

我的一桥大学的本科研究会的学生（三、四年级）隔几年要举行一次海外旅行。迄今已去了纽约、台北。这次因为我来北京任教，学生们就纷纷要求作研究旅行。为了区别与一般的观光旅游，我着实费了不少心思。开始打算到研究生毕业的黄升民先生任副教授的北京广播学院进行交流，但因考虑到需要几名翻译，只得作罢。偶然间，我想到了"中心"。虽说是大学院，但年龄上并没有多大差别。于是就跟学生们商量，他们也很感兴趣。竹田晃主任教授也表示同意。中方办公室在住宿、用车方面给予了很大协助。

于是，十二月八日～十四日，十四名学生来到了北京。十日、十三日下午举行了研究集会和联欢会。双方就青年杂志、校园文化、电视广告等进行了热烈的讨论，每次都要延长时间。联欢会也相当热闹。特别是中方还有学生主动承担了观光导游，日方对此非常感谢。

我想，这样的交流会，待中方学生来日本以后，还可以在一桥大学再次举行。大学时的前辈熊谷圭知老师为我们担任了评议员，竹田老师还在联欢会上让我们欣赏到了他动人的歌声。对于这些，我们都非常感谢。

【社会研究室活动简况】自本学期以来，社会研究室每周五举行研究发表会。历次发表者及发表题目如下：田中重好　战后日本社会的到达点、中国小城镇问题；周维宏　农村工业化理论、关于中国农村的工业化；熊谷圭知　第三世界的都市化与都市－农村关系－；徐向东　异文化中的日本式经营－在中国的导入和第三文化形成的课题；佐佐木史郎　日本社会的地域性；宋金文　日本农家生活方式的都市代。

北京日本学研究センター

通　　信

《第 34 号》

責任編集：鈴木義昭　張龍妹　　郵便番号：100081　Tel：8424893　1993.12.30

ニュース

◇公開講座：第10、12、13回公開講座が、11月8日、12月2日、12月9日（いずれも木曜日）に開催された。講演者と演題は次のとおり。李書成「日本人の危機意識」；周維宏「中日農村の工業化現象の比較」；鈴木義昭「日中対照研究と日本語教育」なお、第11回の公開講座は伝馬義澄氏司会によるシンポジウムとなった（詳細は３ページを見られたい）。

◇11月27日（土）、センターの客員研究員李均洋氏と中国大百科全書出版社は、「日本の経済小説シンポジウム」を主催した。今回のシンポジウムは、学会の注目を集め、国内の関連誌ならびに日本の読売新聞に関係記事が掲載された。

◇修士論文の口頭試問：12月16日（木）から18日（土）の三日間、第七期研究生の修士論文口頭試問が行われ、七期生全員（20人）がパスした。ある学生の論文は、日中両国の試問委員に好評をもって迎えられ、日本の同年齢の学生のそれと比べても少しも遜色がないことが認められた。

◇12月24日（金）、29日（水）の両日、午後2:00よりセンターの教授学生懇談室で、第八期客員研究員の研究成果発表会が開かれた。発表者並びに演題は以下のとおり。李均洋氏「『解雇』－法人資本主義の経済小説詳解－」；斐桂芬「日本企業の国際的節税と政府による反節税対策措置」；王中田「和辻哲郎の日本思想史における地位とその影響」94年1月6日午後2:00からは、朱京偉「日本語からの借用語の漢語への借入時期について」および王克非「明治時代と晩清文学翻訳史の比較」の二題が発表される予定。来聴歓迎。

◇12月27日（月）、天橋楽茶園にて、北京外国語学院主催の外国人専門家「迎春パーティ」が開かれた。会場では、専門家たちは豊富多彩な民間芸能を見ながら、北京の伝統的なスナックを賞味した。

◇12月29日（水）、外国専家局主催による、在京外国人専門家のための迎春パーティが友誼賓館友誼宮にて開催される。プロの歌舞・雑技の外、外国人専門家の出演もあった。センターの専門家もほとんどがこの催しに出席した。

□ 新任専門家　自己紹介（その三）

☆木部暢子先生：専門は音韻論、アクセント論です。今、方言の音声に大変興味を持っていて、普段はテープレコーダーをかついで、畑仕事をしているおじいさん、おばあさんをつかまえては方言を聞いてまわっています。休みの日にはテープレコーダーの代わりに水筒と弁当をかついで、近くの山に登ります。

☆柄沢行雄先生：今年の７月に約１年間にわたるセンターでの勤めを終えて日本に帰国し、この12月にまたセンターにやって参りました（戻ってきました？）。したがって私にとってはこれが３度目のセンターの仕事となります。

７月から12月までの約５ヶ月の間に、北京空港から宿舎の友誼賓館、そしてセンターまでの様子が変わり、また季節が夏から冬に変わったように、この夏まで、あるいは春まで一緒に勉強した学生諸君も大きく、そして小さく変化し、それなりに成長したことを嬉しく思っています。

今回の私のセンター滞在はわずか20日余りですが、この短い間に、私を含めて学生やセンターがどう変化するのか、楽しみです。私もそれなりに頑張りたいと思います。よろしくご指導をお願い致します。

公開講座特集　昭和文学シンポジウム

傅馬義澄

第11回公開講座（11月25日）は、当初の予定を変更、「昭和文学の諸相－転換期の精神－」を特集とするシンポジウムが組まれた。パネラーとして日本からの参加を申し出た新進気鋭の研究者たちの協力を得ての結果である。

まず、柳沢孝子氏（日本橋女学館短大助教授）「家の崩壊」は、小島信夫『抱擁家族』を中心として、戦後的テーマとしての＜家＞そのものの変容解体していく様を克明に報告。次いで、山本康治氏（嘉悦女子短期大学助教授）による「個の変容－村上春樹を中心に－」は、現代社会における個のリアリティの喪失をテーマとして村上の最新作『国境の南、太陽の西』に見られる現実感覚の喪失を指摘報告した。古俣裕介氏（東京経営短大教授）「都市小説の変遷」は、横光利一から村上春樹まで、即ち1920年代から80年代までに見られるモダニズムの系譜を都市小説に絞って概観。佐藤健一氏（日本大学助教授）による「転向論の問題」は、昭和文学に噴き出した「文学と政治」というテーマを、日本の国家権力と社会構成の問題に絞り込み、差別論から転向論への架橋を試みた。

聴衆約120名。パネラーの報告後、熱い質問が出て、予定の時間を延長しての質疑応答が繰り返されたが、それは取りも直さず聴衆、とりわけ学生たちの現代日本文学への関心の強さ深さをうかがわせるものであったと言うことができよう。それぞれに極めて短時間の報告ではあれ、準備された膨大な報告資料も今後の研究に資するところ大いにあるものと思われた。（司会及び文責は傅馬義澄國學院大學助教授）

☆ 日中学生交流会のこと ☆

山本武利

一橋大学の私の学部ゼミ（三、四年生）は、数年に一回海外へ旅行する。今までニューヨーク、台北へ行っている。こんど私が北京へ短期派遣されることになったので、学生の方からゼミ旅行の声が高まった。一般の観光旅行にならないよういつも私は頭をひねる。大学院卒の黄昇民君が副教授をしている北京広播学院の訪問と交流を初めは考えたが、通訳が何人か必要なため、無理と判断した。ふと当センターのことに気づいた。大学院とはいえ、年齢的な差は余りない。そこで学生に打診したら乗り気。竹田晃主任に相談すると結構とのこと。中国側の事務局も宿舎、バスなどで便宜をはかってくれた。

こうして十二月八日～十四日、ゼミ生十四名が訪中し、十日、十三日の午後に研究集会、コンパをすることができた。双方が若者雑誌、キャンパス文化、テレビＣＭなどで議論をかわし、いつも時間延長となった。コンパも和気あいあいだった。とくに中国側の有志が観光ガイドを買って出てくれたことに日本側は感謝している。

私自身は今後この交流は日本に中国側学生が来たときに、一橋大学で再び行えるのではないかと思っている。大学先輩の熊谷圭知先生がコメンテイターをしてくれ、また竹田先生がコンパで美声を聞かせていただいたことにも感謝したい。

【研究室活動報告】

社会研究室：秋学期以来、社会研究室では、毎週金曜日に研究発表会を催して来た。これまでの発表者及び発表題目は次のとおり。田中重好「戦後日本社会の到達点」、「中国小城鎮問題」；周維宏「農村工業化の理論」、「中国農村の工業化について」；熊谷圭知「第三世界の都市化と都市－農村関係－」；徐向東「異文化における日本的経営－中国への導入と第三文化形成の課題」；佐々木史郎「日本社会の地域性」；宋金文「日本農家の生活方式の都市化」

以上、六人が八回にわたって研究発表を行った。